

Title	都市人類学の再構築
Sub Title	
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2005
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.10 (2005.) ,p.1- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 都市人類学の再構築
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20050000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

都市人類学の再構築

2004 年度大会・シンポジウム企画担当 鈴木 正崇

本シンポジウムは、人類学、民俗学、社会学、地理学などの近年の成果を踏まえ、都市そのものの研究だけでなく、都市性や都市的なるものとは何かを問い直して都市人類学の再構築を図ることを意図する。人類学は、当初は島や密林や山岳などの厳しい自然環境の中の隔絶した社会を研究対象とするいわゆる未開社会研究から始まり、調査地もアフリカやオセアニアなどの先住民や植民地下の人々の社会が主体で、強い異文化体験を中核にしていた。しかし、中国やインド、中南米などの複合社会を研究対象とするに従い、都市への関心も高まった。都市は、規模も大きく、異質な人々が寄り集まる、密度の高い社会であり、研究手法も異なる。例えば、都市人類学の成果として、オスカー・ルイスの『貧困の文化』（1966）があり、メキシコシティに居住する5つの家族を取り上げて、日常生活を通して都市性を浮彫りにしている。人類学の都市研究には、1920年代から30年代のシカゴ学派の社会学の影響もあるが、本格的な取り組みは1950年代以降である。日本の場合は、中村孚美や松平誠の日本の祭礼研究が進められ、米山俊直や日野舜也を初めとするアフリカニストが並行して研究を行い、現代は松田素二などが本格的に取り組んでいる。

現代の人類学は研究分野が急速に増大かつ多様化し、都市人類学の独自性は存在するのか、都市民俗学も含めて、その行方はいかなるものかを問い直す必要性が生じている。本シンポジウムは、こうした時代状況を踏まえて、人類学と社会学の対話を目指す企画であり、両者が相互に乗り入れる可能性を探る。都市人類学の主題は、コミュニティ研究に止まらず、ライフヒストリーの検討、ストリート文化の展開、メディア編成の変容、アーバン・エスニシティの構築、祭礼の変貌、社会結合の変化、記憶と場の生成、都市空間の独自性の考察など多岐にわたる。以下では人類学と社会学の接点の可能性を列記しておく。

- 1、エスノグラフィー（民族誌）を新たな視点で作成する。都市の大衆文化やサブ・カルチャーの研究は、カルチュラル・スタディーズと親和性がある。都市の底辺を構成する人々の「ソフトな抵抗」を描くことで社会の動態の理解が深まる。また、生活史の視点は重要で、表象の危機を十分に意識した記述を考え方法にも工夫をこらす。
- 2、グローバル化の考察に積極的に取り組む。1990年代以降、トランスナショナルな動きが急速に進み、都市に流入する移民や難民の研究が比重を増している。世界がグローバル・ヴィレッジと呼ばれる現在、国内の都市—農村の関係性も、世界から浸透する様々な外部の動きと連動して変化し続けており、地域概念も再検討を迫られる。

- 3、空間の考察を視点を変えて試みる。空間をストックとする従来の見方を転換して、フローと考えて、現代の多様な空間のあり方を考察する。場所 (プレイス)、ポジション、サイト、トポス、ストリート、ロケーション、ディアスポラ、エスノスケープ、周縁、境界など、空間に関わる概念の変化や空間の言説化を都市で再考する。言語実践が空間を構成するのであり、実践や知覚や関係性が空間を創り出すとも言える。
- 4、都市祭礼やイベントを通して、人々の時間認識、記憶の生成の諸相、古さを装って現れる想像力の行方を探る。色・音・匂いなど感覚に関わる喚起力を通して、都市民の間で伝統がどのように再構築されるかを考える。都市ではページェントを初めとして、文化のディスプレイが広く展開し、文化が流用され、消費される。観光の実践もその中核であり、同時に文化財指定などを通じての「文化の政治化」の動きも進行する。
- 5、身体性に注目して都市を再考する。ストリート文化の展開に見られるような都市でのパフォーマンスなど感性を通して、新しく作り出される人々の絆について考える。現代日本で盛んな都市祭礼である「よさこい祭り」のような素人にも開かれ「正統的周辺参加」を許容する「実践共同体」を考察する。観客の変容も視野に入れる。
- 6、社会関係が都市の中でどのように結び直されるかを考察する。血縁や地縁などの非選択縁の比重が低下し、会社や民間団体など社縁や知縁による選択縁の比重が高まり、集団からボランティア・アソシエーションへという動きが現代の基調である。また、情報流通の加速化で人々の絆は不定形な動きを示し、日常の実践には無数の軋み音が生じて、矛盾や不安定性が拡大している。その動きの中での戦略と戦術に注目する。
- 7、都市の文化を見直す。異質性と均質性が混在し異種混淆の文化を生成する都市は新たな想像と創造の場である。博物館や博覧会も都市の文化の生成主体で、文化のパッケージ化や資源化、客体化を推進して流通させる。都市は、その対極にあるものとして村落をユートピア化して「ふるさと」を作り出し、ノスタルジアをかきたてる。村落もまたその動きを利用し、イメージ化や商品化を通して都市との関係を結び直す。双方に浸透する複製化や没場所性との葛藤も視野に入れる必要がある。
- 8、国民国家の成立と近代を問う。近代の特徴はネーションの圧倒的な影響であり、民族と国家をめぐる表象と言説が都市を発信地として流通する。国民国家の下で新たに作り出されたエスニシティ、周縁と境界の再措定、辺境の創造、ジェンダー化の再構成などに関与する都市の動きを通じて、国民国家を相対化し近代の逆照射を試みる。

本シンポジウムでは、日野舜也氏にはアフリカの都市生成に関わる社会関係の構築過程を、鈴木裕之氏には音楽を通して生成される都市のストリート文化を、阿南透氏には都市祭礼に伴う民衆の「正統的周辺参加」の事例を述べて頂いた。コメンテーターとしてお願いした禅野美帆氏は、メキシコ先住民の都市・農村関係についての論考を寄せ、アフリカのアサンテを中心に研究を進めている阿久津昌三氏は、都市社会学の先駆者で日野舜也氏の先生でもあった鈴木栄太郎に関する論考を

寄稿している。研究対象が大きな変動過程にあっても、社会的・歴史的文脈の中で理解し、当事者の意図と観察者の状況への関与を意識化して、厚みのある日常実践の社会過程を記述し考察することは全ての基本であろう。

(すずき まさたか 慶應義塾大学文学部)